

仏教の幸福観

吉田 宏 哲

ご紹介いただきました吉田です。今回のシンポジウムでは「仏教の幸福観」というテーマで基調講演するようにということでお話ししたいと思います。ところでこれまで幸福ということについて、例えば日本仏教学会では一度も取り上げられていない。何故取り上げられていないか。幸福というのは何か。仏教はそれについてどう考えているか。これらについて考えてみたいと思います。

さて古代ギリシャの哲学者たちは幸福について語っていますが、それによると幸福は最終目的だと云うんですね。幸福は他のためではなくてそれ自身のためにある。したがって人間の為すあらゆる営為は幸福のための手段であってそれ以外のものではない。またその後、いろいろな時代と地域で幸福について語られている。これらの幸福論はいろいろありますが、結局、幸福というのは外面的な幸福と内面的な幸福とに分けると、普通、

外面的な幸福が幸福であると考えられるが、外面的には幸福のように見えるが実際は幸福感を抱いてはいないとか、外面的には不幸に見えるが実際には無上の幸福を感じているとかということがあって、どうも一律に幸福というものを規定することが出来ない。しかしふつうは健康であるとか財産があるとか、社会的に認められた地位があるとか、将来に不安がないということとは幸福の客観的な条件であると云ってよいと思います。もちろんその場合それらの条件をすべて満たしていないと本当の意味で幸福だとは云えない。何故ならいかに財産があっても健康でなかったら幸福だとは必ずしも云えないでしょうから。つまり財産があるという意味では幸福だが病気がちだという意味では幸福ではないと云えるからです。したがってここでは客観的な条件をすべて満たしている場合は人は幸福であるというふう

に幸福の一応の規定をしておきましょう。

さてところが仏教の場合、世間的な幸福に対してはむしろ否定的であつたと云えます。それは何故かという、仏教の開祖である釈迦は世間的にはすべて幸福だったのですね。何しろ小さいといへば釈迦国というれっきとした国の王子だったのですから。その生活も他の人々に対しては最高級のものであつたし、その家族も王様と王妃様である両親、若くて美しい妻とラーフラ（輓という意味）という子供、そしていずれは釈迦国の王となつて国を治めるという将来、世間ではこれを幸せと云わないで他に何と云うのでしょうか。ところがそういう人がその幸福をすべて捨ててしまつた。そしてそれは何故かという、そこに四門出遊というエピソードが語られています。これは皆様もご存じの話であるので詳しくは申しませんが、ともかく城の四つの門から街に出てゆき、それぞれの場所で老人と病人と葬式と沙門とに出会つた。そしてこの老病死が避けられないことを知り、この問題を解決しようとして、出城したということです。釈迦にとつて城は家ですから出城は出家ということです。そして釈迦は城にいる限り世間的な幸福を享受していたわけですから、その城を捨てることによつて、一切の世間的な幸福を捨ててしまつたということになります。それが二十九歳のときで、難行苦行のすえ三十五歳で悟りを開いた。そしてこの悟りを開いたとき、「不死の法を得た。もはや再び生まれることはない」と云つた、と伝えられています。

そこでそれでは釈尊は悟りを開くことによつて何を解決され

たのかというと、それは老病死の問題であります。釈尊の最初の説法を考えると、これは四諦八正道であると云われていますが、このうちの苦諦は生老病死の問題です。この生老病死はどれも思い通りになりませんね。人が生まれるということは思い通りになりません。この場合、生は生きることではなくて生まれるということです。同様に年を取ることも、病気になることも、死ぬことも思い通りになりません。よく四苦八苦と云いますが四苦というのはこの生老病死のことです。インドから中国に仏教が入つたときに「ドウツカ」というサンスクリット語を中国の翻訳者が「苦」と翻訳した。釈尊の最初の説法は四諦八正道であります。その最初の苦諦（苦であるという真理）というときの苦はまさに「思い通りにならない」という意味であつて、そのように云われると確かに、生まれる、病気になる、年を取る、死ぬということは「思い通りにならない」です。四諦と因果關係が逆になつてゐるがその内容は同じである教に四法印というのがあつて、これは「諸行無常 一切皆苦 諸法無我 涅槃寂靜」と云いますが、このうち一切皆苦が苦諦に対応します。生老病死の「生」を「生まれること」ではなくて「生きること」と考えると、一切皆苦は人生のすべてが苦であるということになつてしまつて、これでは誰もが反発を感じるでしょう。そしてどうも仏教は暗いとか陰鬱であるとかという否定的な評価を受けがちだと思います。しかし生は生まれるということであり、生まれることも、年を取ることも、病気になる

ることも、死ぬこともすべて思い通りにならないと云われると、これには誰もが納得すると思います。ただ納得はしますが、普通の人ではこれは乗り越えることは出来ませんね。しかし、釈尊はこの生老病死の思い通りにならない現実を越えようとして出家修行の道に上られ、六年間の難行苦行の後、転迷開悟せられた。ですからこの転迷開悟の結果は一切皆苦ということが乗り越えられたのですから、絶対的な安楽であり、一切の思い通りにならないことが無くなったから完全に自由自在である。また無常性が乗り越えられたのだから永遠不滅であり、かつ一切の煩惱の汚れが無くなったから清浄無垢である、ということになります。これは後に涅槃の四徳（常楽我浄）と云われています。いずれにしても釈尊はこの生老病死の繰り返し（輪廻転生）から解放され（解脱）、絶対的な安楽（涅槃）を得られたというのであります。しかもただ解脱涅槃の境地に至ったのみならず、解脱涅槃したということを知った（解脱知見）と云われています。これは釈迦の悟りというものの本質をよく表している事柄であると思います。何故なら単に解脱したというのではなく、解脱したということを知ったというのであります。そしてこのことによって釈迦はその解脱の方法を人々に説くことが可能になった。

後の唯識仏教ではこの悟りを夢からの目覚めとして譬えています。それによれば我々が生老病死の輪廻を繰り返しているとき、それは夢を見ているのと同じである。我々の生存はその時々

の条件によって幸せであったり不幸せであったりします。そして幸せのときは喜び不幸せのときは悲しむ。そして一生を終わったときにそれを振り返るとまるで夢のようだったことになる。またあまりにも幸せのときは「夢ではないか」と類をつねってみたり、逆にあまりにも不幸せのときは「夢ならば覚めてほしい」と云います。唯識仏教では我々の迷いの一生は夢を見ているのと同じで、これに対して悟りは夢から覚めた状態にあるのと同じだと云います。それは夢を見ているときは自分がどういう夢を見るかは思い通りになりません。この思い通りにならないということが、まさに仏教の云う一切皆苦であって、仏教の悟りはこの夢から覚めたということに譬えられるのです。楽しい夢を見ているとき起こされると何故起こしたのかと叱られるかもしれませんが、怖い夢を見ていて驚かされているとき、母親が揺り起こしてくれと、ああ助かったと安心する。そのときの母親が仏であり夢を見て驚かされているのが衆生である。仏は生死の夢から覚めて、大安楽、大自在の境地にあるから、衆生の迷いの夢を覚ましてくれること（説法利生）が出来ます。それは仏が生死の夢から覚めて（解脱）、しかも夢から覚めたということを自覚しているからである（解脱知見）。夢を見ている人は夢を見て驚かされている人を起こすことは出来ませんですね。唯識仏教の立場から云うとこの夢と夢からの目覚めということは我々の認識の根本問題に関わっていて、我々は自己と自己の対象世界を實體視し、その實體視したものに執着

している。そしてこの執着に基づいて行為し、その結果苦樂の果報を受けるのである。したがってその苦樂の果報から解放されたいと願うなら、自己と自己の対象世界の實體視を離れよ。そのようにして離れることが出来れば、怖い夢を見ているときに自分や自分の愛する者が恐ろしい化け物に追われて必死になつて逃げているが、夢から覺めたときその化け物（対象）もその化け物に追われている自分（自己）も両方とも消えてなくなり、そこに大きな安らぎがもたらされることになるのと同じである。

これを幸福ということに当てはめて考えると、我々が普通に生活しているとき、幸福であるか不幸であるかは思い通りになりません。これは夢の中で楽しい夢を見るか怖い夢を見るかを決めることが出来ないのと同じです。また夢は覺めない限り永遠に夢を見続けるということも同じです。生老病死の夢も覺めない限り永遠に見続ける。つまりこれは生まれては死に、死んでは生まれるという繰り返しを永遠に続ける。これを輪廻転生と云います。釈尊はこの輪廻転生の苦（思い通りにならないこと）から解放された（解脱）。そしてその結果、大安樂大自在の涅槃の境地を体得され、その涅槃に至る方法を人々に説法されたということになります。それ故これは普通の意味での幸福ではない。そうではなくて普通の意味の幸不幸を超越した大安樂大自在の境地である。しかも目覺めた人のみが夢を見て覺されている人を起こすことが出来るように、仏も恐ろしいこと、

悲しいことに苦しむ衆生を救済することが出来るし、またそれがある場所、ある時期のみではなくて永遠に果たすことが出来る。何故なら仏は三界（欲界・色界・無色界）、六道（地獄・餓鬼・畜生・人・阿修羅・天）の輪廻という空間性・時間性を超越してしまっているからです。よく地藏菩薩が六道を巡つて衆生を救済すると云いますが、そのようなことが可能であるのは、地藏菩薩が六道という存在の形態を超越し、しかもこれらの衆生を救済するという誓願を立てているからであると考えられます。あるいはまた、觀世音菩薩が三十三種類の姿を現し、あるいは千眼千手をもつてあらゆる衆生を救済することが出来るという信仰も、菩薩が悟りを開いて、あらゆる存在の形態を超越し、しかもあらゆる衆生を救済するという誓願を持ち続けているからこそ可能なのでありましょう。

さて仏教の幸福觀は世間的な幸福觀とは根本的に違つているということがこれで明らかになつたと思います。仏教の幸福觀から云うと、世間的な幸福は幾つかの意味で眞の幸福とは云えない。それは何故ならば、

(1) 世間的な幸福は条件付きであつて、幸福である条件が満たされていないと幸福ではなくなつてしまふ。例えば財産があつて幸せを感じているときは、財産があるという条件によつて幸せなのである。もしその財産が無くなつてしまえば幸せであつた分だけ不幸せになる。同様に美しい奥さんとかかわいい子供がいて幸せを満喫しているときに、子供が交通事故で亡くなつ

てしまったら、この世に自分ほど不幸せな者はいないと嘆くでありましょう。このように世間の幸せはすべて条件付きであつてその条件が無くなればそれだけ不幸せになるということを示している。

(2) 世間的な幸せは部分的であつて、完全な幸せということはありません。これは前にも述べたように、財産があつて幸せだが病気がちであるために本当に幸せであるとは云えないとか、あるいはその逆に健康そのものだがお金がないので食べたものも食べることが出来ない、などといった場合があつて、完全な幸福などというものはまずありえないということが出来る。

(3) 世間的な幸せは無常性の影に常に脅かされている。客観的な条件がすべて満たされ、幸福の絶頂にあると感じているときでも、いつかはそれが終わるという不安を無くすことは出来ない。夏の花火の美しさや賑やかなお祭りも、終わった後の寂しさにいつも付き纏われているという経験は誰しも持っているのではないでしようか。

(4) 世間的な幸せは自己の幸せが他の不幸せによつて得られている場合が多い。自分が恋人と添ひ遂げられたとき、その陰で何人の友が泣いていたでしようか。ウナギを食べてうまいまいと云っているとき、ウナギは死ぬほど苦しんでいる。(若きシッタールタ(釈尊の幼名)は掘り返された畑の土の中にいる虫を小鳥が食べ、その小鳥を鷹が捉えるのを見て深い物思い

に沈んだと伝えられている。)

以上のように普通の世間的な幸福は条件性、部分性、無常性、罪責性という限界を免れることが出来ない。仏陀の悟りによる解脱涅槃の体験はまさにこれら四つの幸福の限界を超越したものであつて、ここに仏教の幸福観の次元を異にする完璧性を見ることが出来ると思います。

そこでそれでは釈尊はただこのように完璧なる大安楽自在の涅槃のうちに止まっていたのでしようか。三十五歳で悟りを開かれた後、八十歳で入滅するまで釈尊は人々に対して説法利生の行脚を続けられた。それは前述の如く、夢から覚めた人が夢を見て驚かされている人々を目覚めさせていくかのごときものであつた。そしてそのような目覚めを得た人々はいずれも宗教的救いのもたらす幸福を味わたたのであると思われまふ。それと同時に釈尊は世間的な幸福の条件とみなされる、財産や利益や親族についても味わい深い言葉を残しています。それは「最も良い財産は健康であり、最も良い利益は知足であり、最も良い親族は信頼である、」というもので、最後は「最も良い安楽は涅槃である」という言葉です。

釈尊は悟りを開くことによつて涅槃の境地を体得され、そのような境地に如何にして到達することができるかを説法されました。その説法は最初は四諦八正道であり、また五蘊や十二処、十八界説、縁起説、無我説等であります。これらの教えを奉じて釈尊と同じ境地を目指した人々の集まりがサンガと呼ばれま

した。このサンガは「和合衆」という意味で、出家の比丘・比丘尼と、在家の優婆塞・優婆夷の四衆で構成され、出家者は修行に励み、在家者は三宝（仏法僧）に帰依して、僧侶の生活を財政的に支えました。

仏教は釈尊の成仏から始まったのであって、その悟りの結果世間の幸福を越えた異次元の幸福である涅槃の境地が体得された。そこでこのような幸福を我々自身が体得するためにはどうすればよいかということであるが、それは釈尊の説法のうちで明らかにされています。釈尊の最初の説法は四諦八正道であるということとは前述した通りですが、その後の歴史的に展開したすべての仏教の教えはこの最初の説法の埒外のものではないと思います。ただし、実際にはこの四諦八正道はある時期から正當な評価を受けることが少なくなった。特に大乘仏教が仏滅後四百年頃興起すると、それまでの仏教教団が釈尊の教えを實體化（法我執）し、人々の救済を忘れて自分だけの悟りと法の分析（アビダルマ）に終始していることを批判しました。そして一切衆生の救済こそが無上正等正覚（阿耨多羅三藐三菩提）の条件であるとして（自未度先度他）、不住涅槃（涅槃に止まらずに永遠に衆生済度の菩薩行を続ける）という新しい仏教の立場を標榜し、これを大乘仏教と命名し、それまでの仏教は小乗仏教であるとししました。

それ故、大乘仏教の幸福観について述べると、これは前述の唯識仏教の幸福観がそのまま対応できます。即ち大乘仏教の菩

薩は釈尊が悟りを開いて後、人々の救済活動に専心されたのと同様に、自分たちもこの釈尊のあり方と同じあり方をするを誓願を立て、しかもそれを一切衆生が救済されるまで続行するとしたのです。その場合、菩薩は釈尊の悟りと同じ悟りを開いて涅槃の境地を体験していなければなりません、しかしその涅槃の境地に止まらないというあり方を取るということになります。これを喩で云うと、菩薩は生死の此岸から涅槃の彼岸へ大きな船で人々を導きますが、その船は大乘という乗り物です。菩薩はその船の船長に譬えられますが、その船長は既に涅槃の彼岸に行ったことがなければ人々を導くことは出来ない、ということになります。涅槃を仏教における最良の安樂（幸福）であるとする、それを体験する重要な段階が大乘仏教で説かれている歡喜地という段階です。これは菩薩としての目覚めを得る最初の段階で、この段階に到達したときには、歡喜地という名前の通り無上の喜びが身心に満ち溢れると云われています。その境地に至る方法は唯識仏教の場合は入無相方便観という観法ですが、ここではその詳細に言及することは出来ません。

また人々によく知られている「般若心経」の初めに「観自在菩薩行深般若波羅密時、照見五蘊皆空度一切苦厄」とあって、この中に「一切の苦悩や災厄を乗り切つてしまふ」とあり、一切の苦を乗り越えられればそれは最良の幸福でありましようが、その境地に至るには「照見五蘊皆空」によってであると云っています。この般若思想の論理化とも云える中観仏教は、前

述の唯識仏教とは違ってもっと直接的に仏教の幸福観を説いていると思いますが、それによると幸福と不幸という対立を越えた境地における身心の大安樂と大自在が実現していると云えるでしょう。換言すれば世間的な幸不幸の中にあってもそれを越えた境地の法悦が実現しているとも云ったらいでしょうか（生死即涅槃）。しかも、その法悦は一切衆生の救済という誓願の実践（菩薩行）の中でこそ顕現する（涅槃即生死）と云うのです。

真言密教の読誦經典である『理趣經』には、「菩薩勝慧者乃至尽生死 恒作衆生利 而不趣涅槃 般若及方便 智度悉加持 諸法及諸有 一切皆清淨 慾等調世間 令得清淨故 有頂及惡趣 調伏尽諸有 如蓮体本染 不為垢所染 諸慾性亦然 不染利群生 大慾得清淨 大安樂富饒 三界得自在 能作堅固利」とあり、大安樂大自在の不住涅槃が説かれています。

また本願による浄土往生を信じられた人々は、これもまた至福の境地を体験され、往相回向、還相回向の日々の生活を送っておられるのではないかと思います。以上、意を尽くしませんが仏教の幸福観に就いてお話しいたしました。

（よしだ・こうせき、仏教学、大正大学名誉教授）